

The Bijou of Asia 第1通を読み解く

嵩 満也

(龍谷大学国際学部教授)

目次

はじめに

1. 第1号の記事の構成と刊行の意図

【キーワード】

The Bijou of Asia 松山松太郎 沢井詢 普通教校 神智学協会

はじめに

先の報告書（『2017年度 BARC 報告書』）において指摘したように、1888年7月に龍谷大学の前身の一つである普通教校の教員・学生たちが刊行した雑誌 *The Bijou of Asia* は、日本仏教がはじめて自分たちの主張を欧米に対して発信した英字新聞であっただけでなく、英文で定期的に刊行された仏教雑誌としては世界的に見て最初期のものであったとすることができる。

どのような経緯でそのような雑誌が刊行されることになったのか。欧米諸国だけでなく、アジア各地の大学・研究所・図書館・宗教団体・協会などに送られたこの雑誌は、どのような反響を得たのか。そしてそのことを介して、明治初期の日本仏教がどのような国際的なネットワークを築いていったのか。また、その後そのような国際的な関係はどのように展開することになったのか。そのことが、「国際仏教班」（GAU1-SB2）の中心課題である。

そのことを明らかにするために、国際仏教班では、現在確認できている1888年7月から1889年7月までの2年間に刊行された、*The Bijou of Asia* の日本語訳の作業と、その内容の確認・分析作業を進めている。

今回の報告では、ほぼ全訳作業が終わった1888年7月発行の第1号の内容から明らかなる点について簡単に報告をしたい。

1. 第1号の記事の構成と刊行の意図

第1号の記事の構成は、前回の報告で示したように以下のとおりである。

1. 雑誌題字 (*The Bijou of Asia*)
2. 巻頭コラム (仏陀の言葉【法語】)
3. 巻頭記事 (松山松太郎)
4. 読者からの手紙の抜粋
 - 1) 沢井洵への手紙 (4通)
 - 2) 松山英太郎への手紙 (4通)
5. 記事1 (A Brief Account of Japanese Buddhism/寺院数と僧侶数などの紹介)
6. 記事2 (普通教校の紹介)
7. コラム1 (儒教の言葉)
8. 海外記事の紹介 (L.C.Holloway による、浄土真宗と海外宣教会の活動の紹介記事)
9. 彙報
 - 1) 海外から送られてきた雑誌・本の紹介 (雑誌10本、本2冊)
 - 2) 英語仏教書の紹介 (3冊)
10. コラム2 (劇 *Toy-Cart* の言葉)
11. 編者の言葉 (松山前松太郎によるコメント・寄付の依頼。通信先の告知)
12. 質問への応答 (アメリカのジャーナリストからの4つの質問に対する回答)

第1号は、全体の体裁としてはあまり整っているとは言えない。ただ第2号以降では、一定の編集方針を立てて構成しているように見受けられる。たとえば第2号の構成は次のようになっている。

1. 雑誌題字 (The Bijou of Asia)
2. 巻頭コラム (ブッダの言葉【法語】)
3. 巻頭記事 (Richard Collins “Nirvana As The Goal Of The Buddhism”)
4. コラム1 (Bell Bush と Theodore Wright の詩)
5. 記事1 (雑誌 Bijou of Asia の紹介)
6. 記事2 (A Brief Account of Japanese Buddhism/ 第1号からの続きの記事)
7. コラム2 (ブッダの言葉)
8. 読者からの通信 (タイ・バンコク在住の Chandrdatta と英国・クイーンズランド州南ブリスボン在住の Theodore Wright からの手紙)
9. 記事3 (日本の神智学協会についての記事)
10. 記事4 (インドで日本の天皇がキリスト教を国教としたという噂についての記事)
11. 記事5 仏教宣教会の紹介
12. 雑録 (The Buddhists と The Arab legend)

第1号は、記事とならんで海外各地からの通信を紹介することにより誌面が使われているが、第2号は、第1号に比べると記事を中心とした誌面構成で全体構成もすっきりしている。第1号は、どうしても手もとにある英文記事と海外からの通信を大急ぎにまとめたようにも見えるが、英文による日本仏教の海外発信に対する賛同者が予測した以上に多く集まり、雑誌を継続的に発刊する目途が立ったことから、次第に長期的な展望を持って編集方針が定められるようになったと考えられる。

また、*The Bijou of Asia* が創刊される2年前(1886年4月)に発足した反省会の会員が、1887年8月、すなわち *The Bijou of Asia* 刊行の1年前に出版した『反省会雑誌』の創刊号には、「欧米仏教通信会」が欧米の仏教徒との通信を紹介した記事が掲載されている。欧米仏教通信会の記事はその後『反省会雑誌』上に発表され読者の反響を多く得たが、『反省会雑誌』が爆発的に読者数を増やした理由の一つに、廃仏毀釈の記憶もまだ新しいこの時期に、自分たちが近代化の手本としている欧米社会では、かえって仏教への関心が高まっていることに対する強い関心がはたらいていると言えるのではないだろうか。そのこともあってか、1888年11月には、『反省会雑誌』の中の一部であった「欧米仏教通信」の記事を、独立した雑誌として刊行したのである。『海外仏教事情』という名前で出版されたこの雑誌は、1889年7月に *The Bijou of Asia* が廃刊された後も、1893年11月に第40号をもって刊行が停止されるまで出版された¹。

この3つの記事と雑誌、欧米仏教通信会の記事、*The Bijou of Asia*、『海外仏教事情』の編者として活躍したのが、普通教校の英語の教員であった松山松太郎と学生であった沢井絢(後の高楠順次郎)らであった。ところが、これまで松山松太郎と沢井絢の関係や、両者が深く関わっているそれらの3つの記事・雑誌の関連性についての研究は行われていない。従って、そのような点についてさらに検討を深めていかなければならないが、この報告書では指摘にとどめ、次年度の研究課題としたい。

第1号の内容であるが、巻頭記事は先の報告書で触れたように松山松太郎の発刊之辞である。松山は、「アジアは世界の中で最も広大な地域であり、地理的・歴史的に、あるいはむしろそれよりも物質的・道徳的な面で非常に注目すべき地域」であり、特に「マホメット教、バラモン教、仏教、キリスト教という四つの世

¹ 『海外仏教事情』は、その後、1934年8月に再発行され1944年10月まで出版された。

界の偉大な宗教がこの土地に起源を持つという事実」を指摘し、当時日本が近代化の手本としていた欧米社会にひろがっているキリスト教も、もともとアジア発祥の宗教であると述べている。このことは、明治維新以降進められた近代化が欧化主義という実質を持ってすすめられ、欧米社会に対する日本人の劣等感が助長されていることへの反発であると同時に、1890年代以降に生まれる欧米列強によるアジアの植民地化に対して汎アジア的に抵抗するアジア主義的な思想と共通した視座を松山がもっていたことを窺わせる。

まず巻頭言で注目されるのは、そこで松山が「キリスト教は、今やヨーロッパとアメリカで急速に没落しつつある」と指摘している点である。当時の仏教界は、怒濤のような廃仏毀釈の嵐から立ちなおりつつあっただけでなく、1880年代後半頃には次第に思想的な立ち位置が見だし、近代化する社会の中で一定の自信を回復し、キリスト教に対しても単なる排斥運動ではなく、積極的に思想的な批判を加えるようになっていた。けれども、世界情勢について十分な知識を有していたものは少なかった。ましてや、欧米社会における宗教情勢について知るよしもなかったはずである。そのような情報を松山は、創刊号から『反省会雑誌』に掲載された「欧米仏教通信」の報告が示しているように、直接海外の仏教に関心を持つ人々との通信をとおして得ていたものと考えられる。

そのこととも関連して、興味深いのが「読者からの手紙の抜粋」である。*The Bijou of Asia* 第1号は創刊号であり、当然その読者はいない。従って、ここで紹介されている手紙は、それ以前に受け取った手紙ということになる。受け取ったのは、松山松太郎と沢井絢であった。どのような経緯で、海外の仏教に関心を持つ人々との通信が始まったのかについては、京都にあった英語学校オリエンタル・ホールの平井金三を介してであろうと言われる。ただ、英語教師をしていた松山はいざしれず、広島福山から普通教校の第1期生として入学した沢井絢が、既に手紙の受信者に名前として挙がっていることには驚かされる。その後沢井は、高楠家に養子として入り、1890年にはイギリスのオックスフォード大学に入学する。

第1号には、それぞれに宛てられた4通ずつの便りが紹介されている。沢井宛の次の手紙を読むと、*The Bijou of Asia* の出版以前から、英語で浄土真宗を紹介した文書があったことが分かる。

あなたがお送りくださった簡潔な仏教解説に対して、心から共感します。私は、阿弥陀仏であり、私の救済の法たる無上覚 (supreme) を通して救われていくことを切に願っています。

手紙の主である Francesca Arundale (1874-1924) が注2) 受け取った「簡潔な仏教解説書」とは、明治初期におよそ2年間イギリスを拠点にヨーロッパに留学した赤松連城が書いた、“A Brief Account of Shinshu” のことだと考えられる。*The Bijou of Asia* の記事以前に英語で書かれた真宗の解説書は、1879年5月に『興隆雑誌』第3号の付録として印刷されたこの小冊子ぐらいだからである。また、しかもその小冊子には、ここで使われている手紙の表現とよく似た言葉使いが出てくるからである。

注2) Francesca Arundale フランチェスカ・アルンデル (1874-1924)

The Idea of Re-birth 1890

My Guest: H. P. Blavatsky 1932

沢井への2通目の手紙は、アメリカ神智学協会のジャッジ (William Q judge) からのものである。

神智学協会は、1875年にアメリカのニューヨークで、ロシア系の女性でオカルトなどの神秘思想に興味を持つヘレナ・ブラヴァツキーと、弁護士で精神運動にも参加していたヘンリー・オルコットを中心に結成された神秘思想団体である。登用しように大きな関心をいただいた二人は、1880年代にインドに中心拠点を移し

活動を拡大した。なかでもオルコットは、スリランカのダルマパーラとともに仏教復興運動をすすめ、1881年に『仏教教理問答』を著した。その一方で、平井金三らと手紙をとおして交流を深め、平井らの活動により、1889年には日本を訪問し全国各地で講演会を開き、大きなブームを引き起こすことになる。

ジャッジからの便りは、松山や沢井らに、自分たちの雑誌（The Path）に掲載する、仏教に関する英文記事を送ってくれるように依頼している。また、最初に

「教校に関する情報に対して御礼申し上げます」と言っているが、これは第1号にも掲載されている「普通教校」の記事と同じものだと考えられる。

第4通では、「アメリカにも仏陀やその教えを敬い尊敬する人は少なくありません。」と表明しつつも、仏教徒と呼べる人はほとんどいないと嘆いている。そして、「本当の仏教の教えを知的に説き広め、仏教徒となりうる人びとを仏教会へ導き入れる者」が必要であると指摘している。仏教伝道者の派遣を要望する声は、沢井への手紙だけでなく、松山への4通の手紙にも見られる。

キリスト教はもはや我が国でも衰えており、ヨーロッパにおいてはそれ以上の状況にあります。仏教徒がやって来て、教えを説いてくれるなら、それはいいことでしょう。仏教は神智学徒たちに諸手を挙げて歓迎されるでしょう。

まず、この手紙を書いた Theo T. Edwolleb は、手紙の内容から見てアメリカ人であることが分かる。彼は、「キリスト教が衰退しているいま、もし日本の仏教徒が仏教の教えを伝道するためにアメリカへ来てくれるなら、神智学徒は諸手を挙げて大歓迎する」と、やはり仏教伝道者の派遣を依頼している。

また、松山が巻頭言で述べていた「キリスト教は、今やヨーロッパとアメリカで急速に没落しつつある」という指摘は、まさにアメリカ人の Edwolleb からの手紙の情報にもとづくものであることは明白である。

またこの松山への便りは、沢井への2通目の手紙と同じくジャッジ（William Q judge）が送ったものである。その文面から分かることは、当時ジャッジはアメリカではなくインドに滞在していたということである。

次に記事の内容について少し触れておくならば、記事の一つは日本仏教の紹介であり寺院の数や僧侶の数といった、以下のような統計資料を紹介している。

| (宗派) | (寺院数) | (僧侶数) |
|------|--------|--------|
| 天台 | 4,761 | 3,094 |
| 真言 | 12,914 | 7,960 |
| 浄土 | 8,308 | 6,708 |
| 禅 | 25,910 | 17,504 |
| 真宗 | 19,168 | 16,766 |
| 日蓮 | 5,008 | 4,078 |
| 時宗 | 528 | 380 |
| 念仏 | 356 | 283 |
| 法相 | 24 | 13 |
| 計 | 79,907 | 56,866 |

ユニークな主張としては、日本の仏教が多くの宗派に分かれて活動していることについての独自の解釈である。

仏教の基本的な考え方では、一切世界において恒久的・恒常的な状態のものはなく、「我」と私的できるものないとされる。そして、仏教の目的は、身体「無明」を転じて「明」にすることである。あらゆる仏教宗派はこの基本的な考え方と目的を共有している。しかしながら、如来が説く行や教えの内容にはそれぞれ差異がある。これは、如来があらゆる人間が置かれた状況に応じて教えを説き、彼ら全員が迷いや輪廻から逃れることが出来るようにするためのものである。こうした結果、仏教は宗派に別れることになったのである。

つまり、人間の置かれている状況に応じて如来は教えを説くという対機説法により、多くの教えが説かれ、そのことにより日本仏教は多くの宗派に分かれることになったのだと説明しているのである。

また、「普通教校」についての紹介記事は、以下のような内容になっている。

普通教校について

1885年に創設されたこの学校は西本願寺に属しており、異なる宗派の知識についても英語で講義が行われている。他にも、仏教学 (Buddhist science) が講じられている。

本校は僧俗を問わず入学を認め、またどの宗派に属しているかも問われない。現在、予備校の生徒も含めると約300名の学生が在籍している。現在の建物は狭小のため、まもなく新たにより大きくて広い建物が上質な土地に建設される予定である。それは1000名の学生をも収容できる大きさである。本校やその他（特に真宗）の影響により、仏教の状況は徐々に改善に向かっている。

本校の学生は将来に対して高い志を有し、規律を守って行動する。田舎者の飲酒に対する彼らの深い懸念から、禁酒会が組織され、良き信仰のために価値ある月刊誌も刊行されている。彼らはその宗教を海外へ紹介し、伝道する情熱を抱いている。

さらに、紹介記事では、反省会（禁酒会）について続けて詳しく紹介している。また、最後に反省会の会員数について次のように言及している。

1886年3月、最初に設立された際には、僧侶を除くとわずか89名の会員しかいなかった。1887年8月、後の12月に「反省会」と称されるようになる月刊誌が刊行された。この間の5月に6号を刊行し、会員は600名にまで増えた。確実に、最も影響力のある仏教雑誌の一つである。

The Bijou of Asia を刊行した「海外宣教会」のメンバーは、基本的に反省会のメンバーと重なっており、反省会ほどではないにしても、創刊号以降、賛同者の数は漸増していったのである。

また、最後には次のような *The Bijou of Asia* の紹介が掲載されている。

THE BIJOU OF ASIA

本誌は、仏教をめぐる海外と交わされる書簡を収録する雑誌であり、日本の京都で発行されている。本誌は、海外の友人をはじめ、まだご縁はないが、我々の活動との交流を切望する人びとに対して送付

される。友人や本誌が送られる方、また本誌を読む機会がある全ての人には、是非ともご意見やご感想をお送りいただきたい。

我々の活動に賛同する人、あるいは我々の宗教に関心をもつ人びとからの寄付や記事の提供を心待ちにしており、それに対する感謝は本誌のなかで提供者の氏名とともに掲載される予定である。

本誌は定期的に発行されるわけではないが、可能な限り頻繁に発行していきたい。なお、編集者と出版者は普通教校講師の松山氏である。本誌への連絡はすべて編集者で、日本・京都にある西本願寺の普通教校の松山氏まで。